

# 西遊夢錄

(二十四)

## 瀧川規一

### 蘇國の部

「アイオーナの十字標柱」(續) 十字標柱が紀念碑の目的を以て建てられたものと、土地村落の境界を明示することを目的として建てられたものとの他に、都會の市場に建てられたものがある。市場の十字標は修道院があつた町に限つて居る。抑も町の十字街は神聖な十字架の象徴であると昔の修道僧等によつて考へられた。更にその意味を顯揚する爲めに十字標柱を建てその階段上に立つて修道僧は市の開ける朝に周圍の村落から集り來る人々にお説教をした。修道僧の教へるところは至極簡單であつて實物教授の方法をとつた。信條若くは神學などの六つかしいことは云はなかつた。主として農作物を嚮ぐ爲めに附近の村落から集つた農夫等に對して單に取引に忠なれ真なれと説いた。標柱の建てられた直接の目的はその十字架を象ることによつて人々に宗教心を喚起し市場の取引にも道德心信仰心を忘るなと教へる爲めの目標であつた然るに最初説教の目的で立てられた十字標柱が、斯く集つた人達の爲めに夏季の驟雨を避ける雨宿りを作つてやる必要が起つた。従つて標柱の形は最初簡單な柱に過ぎなかつたが

遂に變じて六本若くは八本の柱から成り立つ六角形若くは八角形の亭式の建物となり屋上に十字標柱が裝飾的に名残りを留めて居るに過ぎなくなつたものもある。更に變じて今日吾が邦にて見るが如き市場の建物若くは取引所の建物となつた故に純然たる取引所となつて居つても建物の一部には昔を語る十字架若くは道德的意義をもつ意匠裝飾が必ず附けられてある。商取引が斯くの如き歴史の變遷をもつて發達して來たとすれば、商業道德の起源はまさに此處にありと云はねばならぬ。商業立國の英人の商業道德が十字標柱下の説教に起源を有し、取引所の建造物が十字標に端を發してあるのであるから、説教標柱變じて取引所となつたと云つても蒼海桑田程の變化ではない。欺かすんば商買にならぬと心得てある輩にとつては或は餘りの變り様であると思へるかも知れぬ。只滑稽なるは神聖にして汚濁を斥ける可き筈の修道僧が集る農夫から課賦金を徵集し、清貧なる可き修道僧が懐の温まるに従つて次第に淫亂に墮したることである。修道僧の墮落の果は二人三人の蓄妾を敢へてなし豪奢の生活をなし遂に僧院諸共僧尼制の破壊となつたのである。

説教標柱の他に「泣き標柱」(Weeping Cross)と云はれる十字標柱がある。贖罪の難行を教風の僧侶から強ひられて可憐な女性が心の苦を標柱下に人知れず吐露して秘かに泣き明かすのである。時には未來の福利を祈る爲めに利用された標柱もある。セーバン(Seyvan)河畔風景佳絶な處に建てられて居るものの如きは水夫がその標柱下に來つて航海の安全を祈り或は航海を無事にしました時には感謝の祈を捧げるのである。單に福利を祈るだけのものもある。喜謝金を受ける孔さへ設けられてあるものさへある。甚しきは婦人が夜陰秘かに十字標柱を撫して子福を祈ると傳へられるものすらある種々の形式の下に建てられた十字標柱中形式の最も完美してゐるものはエドワード一世(Edward I)の皇后エリナ(Elisabeth)の靈柩を旅先のノッチンガムシヤ(Nottinghamshire)のハービー(Harby)から倫敦のウエスミンスタ寺院まで運ばれる途中、靈柩の休息した處々に建てられた標柱である。皇后は國王に隨つて或は聖地に或は蘇國に或はウエールズ遠征と共にし、その容姿と愛嬌とによつて國民一般に愛せられ異種族すらもその愛に服したと云はれて居る。その崩去に際しては靈柩の遺ふ處に十字標柱を建てた。斯くして建てられた標柱は最初十二基あつた。然るに今日には只僅に四基だけが残つてゐる。ゲッチングトン(Geddington)にあるもの、ノーサンプトン(Northampton)にあるもの、ウォオルタム(Waltham)にあるもの、及び倫敦のチャーリング、グロスにある四基である。今日英國で新らに建てられた記念塔の多くは以

上の四基の何れかを模したものである。アイオーナの聖域には二基の十字標柱がある。その意匠の簡素粗大なる點に雅味があり純基督教の圖案でなくて異教的な處に興味がある。恐らく十字標柱の様式中古きものに屬するのであらう。各地に残存する十字標柱の歴史を探ぐるならば意外の興味を見出すであらうし、十字標柱に絡まる傳説も亦小説詩歌の材料となるに充分なものがある。

【グレン・コの谷とエチツの谷】グレン・コ(Glen Co)の谷とエチツの谷(Glan Eibh)とを採勝する客の爲めにシヤラバンかオーバンの町から出發する。余が往訪の時乗合ひの客僅かに六人である。何れも蘇人である。五十前後のおぼさんの連中が四人、女群の長たる青年が一人、それに現筆者が加つたのである。蘇國人の旅客には有勝ちなことではあるが乗り合ふと間も無く打ち解けて話し合ふ。スチヴンソン(R. L. Stevenson)の探偵小説及び海賊小説である「被誘拐」(Kidnapped)に出て来る少年デヴィ(Dave Laddie)がアラ(Alan)と共にグレン・コの谿谷と山野とを走り奔流を飛び超え行く物凄く光景に話の花が咲く、グレン・コの谷はマグドナルド豪族の一門がウキリアム一世の時代に戦敗の結果婦女子に至るまで虐殺された處である。その残忍な戦を恰も昨日の出来事であるかの如く運轉手君は車を停めて熱辯を振ふ。虐殺のあつた場處には雜木の茂る處もあれば、また綠草葉かな平丘の窪に清泉をたゞへ此處彼處に繪の如き俵松が数本立つてゐる處もある。豪族等が戦争を始める時には必ず婦女

子や小供等を一定の場處に隠し集めて置く。然し戦闘員が全滅すると非戦闘員たる婦人子供等までが勝者の爲めに恣に拉し去られる。彼等の意に従はざる時は婦女子と雖も虐殺の憂目を見る。何れの國を問はず既往の戦闘は斯くの如く慘であるが、世界大戦に於て同盟國、殊に英人のとつた態度は敵國の婦女子を決して犯さなかつた。また敵國の非戦闘員を侮辱しなかつた」と最後に至つて運轉手は口を滑らした。乗合ひの青年は余に向つて「お前の國はシベリアに於て婦人に侮辱を加へたと新聞に書いてあつたが事實さうか」と話の途切れる機會を捕へて余に詰めかける「自分は戦争に参加しなかつたから事實の有無は知らない。恐らく爲めにする捏造説であらう。然し倫敦には當時白耳義人が避難して來たので、市民は家を提供した。家を提供したのみならず後家や娘まで提供したので、今日に至るまでその遺風が消失せず附近の田舎娘が大抵二人三人連れを誘つて郊外の公園に夕方出沒するではないか。また非戦闘員となつて國家の爲め身を犠牲にして戦地に働いた大英國の若き婦人等は今日大に氣焔を擧げて女子優秀論を説く。その論戰中に、戦地に於ける婦人の活動の極秘を説いた者がある。毛髮には毛虱が生いた。頭髮は勿論のこと身體の毛のある處には毛虱が悉く卵をつけた。起きても臥しても毛虱に責められた。のみならず平常の婦人の服装は活動に不便である。その結果は婦人は鬪髮となり、毛髮を悉く剃る習慣が新に生れた。また袴を極めて短かくするに至つた。更に既往男子がとつた自由なる舉動を女子がより以上にするや

うになつた。その終局は斯うである。男子が三くだり半で兼になつた女を棄てる事が出来てもそれには女に代償の金を拂はねばならぬ。然るに女子は代償なしにハカキ一枚の意志表示で男子を乗り換へることが法律で許されるやうになつた敵國のみに婦人侮辱の責を課する時代が失くなつてゐるではないか。英國然り佛國然り獨乙然り婦人の自覺はそれに至つて留るではないか」と反問する。斯くして五人對一人の論戰がグレン・コノ古戦場が始つた。婦人等は中々の饒舌家である。將に一人を説き伏せんとする時一婦人は「でも黒人に凌辱されることは白人婦人の耐え忍ぶ處でない」と云ひ切つた。「ではあなたば黒人の經驗があるか」と反問すると、青年は「そんな質問を婦人に對してするのは婦人を侮辱する」と云ひ血相を變へてゐる「でも同盟國の日本人に對して黒人の例を擧げることが既に侮辱してゐるではないか」とやりかへす。この時運轉手君何を思つたか莊重な口調で「皆さんよく私の云ふことに傾聴して下さい。一つの話があります」と云ひ出したので何事かと一同は靜まる「私の話は黒人の經驗談です」と彼は云ふ。婦人の一人は「オヤヤヤ」と半帖を入れる運轉手君は半帖の皮肉評位には尻目も呉れない。「私の黒人の經驗は」と運轉手君が繰返へす。一同はどつと笑ひ出す「その唇の深紅なことです白人婦人の唇は」と云つて彼は婦人一同を見廻し「あなた方の唇の赤さでなく緋の色です。紅の色です。白人婦人は逆も適はないのを自覺したで紅をつけ出したのです」と運轉手君は結論す。青年は言葉を挿んで、

「深紅な處はその他にもあるか」と問ふ。「君話せるな」と運轉手君は云ひかへす。一同は再びどつと吹き出す。

笑聲が山の静けさを破つたか山の陰に隠れて居る小屋から男女老若が現れ來り、異邦人を物珍らしげに横からも縦からも見上げ見下ろしてゐる。見物は御勝手であるが彼等が喋るゲリツク語の評語が無遠慮である。あの金縁の目鏡はエナンバラ市で買ったのであらう。鼻が低いね。でも頭髮丈けは別けてゐる。あの服装は故國の服装が知ら。頬骨が高いね」と云ふやうな言詞が不充分ながら判る。お前等は凌辱された婦人の子孫だね」と云ひたかつたが、それだけは控えた。否云ふ勇氣を持たなかつた。

運轉手君に急かれ再び車上の人となり、ロツホ・エチヅ(Loch Eive)の岬に行く。湖面は陰暗の色を漂へ對岸の山色は亦暗澹としてゐる。天空も亦鈍闇色である。湖上を徂來してゐる小汽船は遙かに小さき姿を見せ黒煙を糊引かせてゐる。岬の小亭に甚食をとる。食後亭前松林の岩角に腰を卸ろして只ひとり湖面を眺めて居る。朝間の論戰の結果が誰も話かけて來ない。然し亭内ではゲール語を話すもの、蘇語を語る者の聲が物喧しい。蘇語の國にあつては英語を喋る者はモガ或はモボである。紳士淑女の言である。ゲール語の國にあつては蘇語を語る者はハイカラである。優越人である。給仕女は三語の遣ひ別けを巧にする。その女は脚が短くて太い。中背で黒髪である。エチヅ湖の暗色が妖精となつて現はれて來たやうな艶嬌の態を見せる。然しエチヅの湖面と空色とは

萬象を陰暗の色に包んでゐる。長居は無用と心得たらしく一行は云はず語らず定刻前に車上に鎮まり運轉手に歸路を迫る車は再び谿谷を超え河橋を渡り人影見えぬ丘陵の間をひた走りて走つてロツホ・オート(Load Aye)に迂回しオーパンの町に着く。停車すると異口同音に長太息と背延びとなす。

【カレドニアン・カネル】カレドニアン、カネル(Caledonian Canal)の名を聞くと共にスエズの運河或はパナマ運河に等しき好奇心が湧き起る。この水路は北は獨乙洋(Germin Ocean)と南は大西洋(Atlantic Ocean)とを全長六十哩半に亘り幾多の湖水と河と運河とで結び付けて居るのだと聞く丈けでも豪勢な感じがする。そのうち三十七哩半は運河によつて湖水と河とを結び付けてゐる。この長き水路を端から端まで通つて居る汽船は遊客を殊の外に歡待すると聞けば遊心勃勃として起る。加ふるに航程僅に十一時間である。オーパンから早朝の船に乗れば夕方にはインヴァネス(Inverness)に着く。歸途は汽車で歸れば愉快な旅行が出来る。話喰ひが宿の者の話に乗つて愈實行することになつた。

船客は悉く蘇人である。彼等の喋る言葉には蘇語の地方的訛があるが然らずんば純然たるゲリツクである。彼等の所謂ゲリツクである。多くの眼は一齊に異邦人に向つて鋭く輝く。誰云ふとも無く甲板の此處彼處で、異邦人の旅行の目的に就いて取沙汰してゐるのが聞える。取沙汰の聲が一類した後にはまた異邦人に向つて眼の矢の一齊射撃である。次第々々に近寄り來た一人は直接余に旅行の目的を問ふ。

珍らしきは異邦人なる哉と云はばかりの顔を誰も彼もして眺めて居る。

オーバンを去つた船はケララ (Kerara) とリスモア (Lismore) の兩小島を左舷に見て、ロツホ・ロツホ・ニンネ (Loch Linnhe) の湖に入る。ロツホ (湖) とは云ふものの實際は内地に深く切り込み浸入してある海の入江に過ぎない。船は入江を北上して各岸のバラチユリツシユ (Barclay's) に寄港して客を捨ふ。蘇國の最高峰メン・ネヰイス (Ben Nevis) は右岸遙かに山容を見せてある。入江の北端に近き右岸にはウキリアム要塞 (Fort William) と呼ばれる物恐ろしき埠頭がある。此處から船は初めて水閘に入つて水準の一層高き水面に浮ぶ。水閘を出づればまた水閘が来る。水閘によつて水準の階を登ること八回、船を棄てて堤防を歩む客は船の進行の遅なるに耐え兼ねた人々である。八箇の水閘の連鎖を總稱して「ネプチューンの梯子」(Neptune's Staircase) と呼ばれてゐる。海神の梯子段を登つて船は漸くホルマン (Corrach) に至り更にバナヒ (Banavie) と呼ばれる運河の南端に着く。右岸に見ゆる古城はカメロン豪族 (The Camerons) の居城の名残りである。再び水閘を登ること二回にして細長き湖水に入る。湖水の名をロツホ・ロツホ (Loch Lochy) と呼ぶ。長さ十哩幅一哩と云へば如何にも帯の如く細長き湖水である。湖の北端近くにはベン・タイ (Ben Tigh) 山が見える。山麓には十六世の半頃にフレイザ家 (The Frazers) とマクドナルド家 (The Macdonalds) と鬩ひつ合群一千の

兵士のうちに生き残つた者が僅に十人であつたと云ひ傳へられる古戦場がある。蘇國豪族等の相互に戦つて居た有様は日本の戦國時代に似てゐる。殺伐悽慘の空氣が山野で充ちてゐたのである。湖を縦航すること暫にして二哩ばかりの運河に達する。運河を過ぐればまた小湖に入る。ロツホ・オイヒ (Loch Oich) と云ひ水準の最も高き湖面である。ロツホ・オイヒよりまた水閘が始まる。合計七水閘である。水閘毎に水面は次第に低くなる。第七の水閘を出づればロツホ・ネス (Loch Ness) に入りオーガスタス要塞 (Fort Augustus) に着く。水閘を下る間のもどかしさに耐え兼ねて乗客はまたも徒歩を續ける。ネス湖は三十七哩の長さで一哩ばかりの幅である。蘇人はその不凍港なることを誇り顔に語つてゐる。フオイユルス卓頭 (Foyers) にて降りる客の二三を見受けるネス湖の次はロツホ・ドツホフオール (Loch Dochfour) である。またも運河によつてミユイルタウン卓頭 (Mintown) に着く。客たちの自動車にて遂にインヴァネスの町に入る。翌日シヤラバンにてゴードラ城 (Gairloch Castle) 附近の見物をする。沙翁の悲劇マクベス (Macbeth) の主人公マクベスが城主ダンカン (Duncan) を殺した城を取圍む物陰暗き森林中に彷徨する。城そのものは漸らしいが、吾々の興味は附近の自然物にある。魔物の出没した山野の舞臺背景を考案するには好個の材料である。